

# トリカブト

中西美子

明日の仕事の準備のため銀座に花を買いに出ました。何件か馴染みの店を見ていると紫色の変わった花を見つけました。「これは、何か」と尋ねると「トリカブト」だと言うので俄然興味が湧きました。名前の由来は、舞臺で被る帽子に似ているからです。英名ではモンクスフード（僧帽）だそうです。草全体が有毒で、特に根は、猛毒です。薬として強心薬や鎮痛薬になるそうです。十勝のアイヌは、毒矢に使っていたそうです。熊も捕っていたとのこと。トリカブトの毒で蝦夷地に君臨することができたといわれています。世界中に自生していて古くから薬や武器に活用されています。マスコミを騒がせた保険金殺人事件があります。五年間で三人の妻を亡くした神谷被告のトリカブト保険金殺人事件、発覚したのは三人目の妻が沖繩旅行で死んだことからです。妻は、三人の友人と那覇空港からホテルに向かい、神谷被告は、急用で戻っていて、別れて一時間四十分後に妻は、亡くなった。トリカブトの毒は、即効性だからといって無実を主張するも検死に当たった医師が保存していた血液からフグの毒も検出され遅効性のフグの毒と混ぜたことが判明して逮捕、投獄された事件とか本庄保険金事件があつて、物騒な植物となったのでしょう。花の流通が減っていたので、私も初めて出逢つてこんな売つてんだと思つた次第です。年の初めから縁起でもない花の話でしたが美しいものには、毒があるのですね。



ノーベル文学賞はどのようにして決まるのか

池井

優

(慶應義塾大学名誉教授)



## カズオ・イシグロの受賞

「カズオ・イシグロ氏文学賞―日本出身・英作家」

新聞一面に大きな活字が躍った。日本の長崎で生まれ、五歳で父の仕事にすがってイギリスに渡り、イギリス国籍を取得したカズオ・イシグロ（石黒一雄）が二〇一七年のノーベル文学賞を獲得したのだ。村上春樹などより事前の予想では下位だったの得意さかサプライズの受賞であった。

カズオ・イシグロの受賞理由は「感情に強く訴える小説で、世界とつながっているという我々の幻想の下に隠された闇を明るみに出した」。イシグロはイギリスで暮らす日本人女性を主人公に故郷を思う気持ちや時間の移ろいを主題にした初の長編「遠い山なみの光」（一九八二年）で注目を浴びた。イギリス貴族の執事を描き、大国の栄光と没落、戦争の問題をつづつた「日の名残り」（一九八九年）でイギリスの権威あるブッカー賞を受賞し、国際的な評価を高めた。その後臓器移植

をするクローンが主人公の「わたしを離さないで」（二〇〇五年）は日本で映画化もされた。そして近刊の「忘れられた巨人」（二〇一五年）は古いイングランドを舞台にした記憶と忘却や現代の社会情勢などを視野にいたれた作品である。

自然を対象とし、実験、観察、数理に支えられそこから一般法則を導き出す自然科学と違い、生活環境、民族的伝統、著術形式など異なる文学作品をどのように評価するのか。一九二五年に受賞したバーナード・ショウは授賞後のインタビューで皮肉たつぷりに言った。

「ダイナマイトを発明したのは、まだ許せるとしても、ノーベル文学賞を考へ出すなんて言語道断だ」。ショウは賞は受けたが、賞金は全額イギリス・スウェーデン交流のための基金設立に寄付することでやきもきする関係者をはっとさせた。

## ノーベル文学賞の制定と選考

ノーベル賞の創始者アルフレッド・ノーベルはダイナマイトを発明した科学者であったが、少年時代から文学に関心を持ち、長じても詩や戯曲を書くなど文学熱は醒めなかつた。母国語のスウェーデン語に加えて、英語、フランス語、ドイツ語などにも堪能であり、外国の文学作品も翻訳も熱心に読んでいた。ノーベルは何度か遺書を書き直したが、最後の遺書に他の分野と並んで、文学も賞の対象とする条項を加えた。その選考はスウェーデン・アカデミーに委ねた。

文学賞の選定に当たり、毎年ノーベル賞委員会は世界各国のペンクラブ会長、大学の文学・言語学の研究者、かつてのノーベル文学賞受賞者、スウェーデン・アカデミーのメンバーなど、文学に関連する世界中の関係者（六〇〇人〜七〇〇人）に推薦依頼状を送る。世界各国から寄せられる推薦書をもとにロングリスト（三〇〇人〜三五〇人）を作り、委員会が第一次選

考をおこなって一五名〜二〇名に絞り込む。第二次リストをもとにノーベル委員会が五名前後の第三次リストを作成し、アカデミー全員が出席する例会に提出される。その席で検討が加えられ、一八名の会員がそれぞれ推薦したい一名の名を書いて投票する。最後は多数決で決まる仕組みである。

日本人初の受賞者、川端康成は何故選ばれたのか

これまで日本人でノーベル文学賞に輝いたのは、川端康成と大江健三郎の二人である。川端康成が推薦のリストにはじめて載ったのは一九六一年であった。当時の委員会のコメントとして「この日本人作家の作品は、心理描写と芸術描写に優れた技術が見られ、上手にそれらが表現されている。ヨーロッパの自然主義に影響を受けた同時代の日本人作家数名のなかでも抜きんでていてわれわれを魅了するものがある。特にその作品のなかでも特有の表現力を持って描かれた作品は、千羽

鶴である。しかし、翻訳されたいままでの作品が少なすぎるので、現状ではノーベル賞を授与するに相応しいか決めることはできない。よってもう少し延期して考察すべきである……」。

やがて川端の作品は英語をはじめ欧米の言語に翻訳され、選考委員は、翻訳を通じて川端文学に接するようになった。川端康成のノーベル文学受賞（一九六八年）は翻訳なくしてはあり得なかった。川端の作品を見事な英文にしたのはエドワード・サイデンステッカーであった。サイデンステッカーは戦時中に設立された米海軍日本語学校で学び、戦後東大大学院で日本文学を研究、やがて日本の作家の作品を翻訳していった。川端の文章は独特の美しさを持っている。日本と欧米の文化、生活習慣双方を熟知するサイデンステッカーの翻訳、さらにその英語からスウェーデン語などへの重訳によって川端の業績は世界に知られていったのである。

カズオ・イシグロの場合は、完璧な

英語で日本の事象と心情「もののはれ」などを表現、それが受賞に大きく役立ったことはいまでもない。





製造工場では、すべての瓦せんべいが手焼きされている。

明治から変わらない味

# 瓦せんべい

「かわらせんべい」

宗家くつわ堂

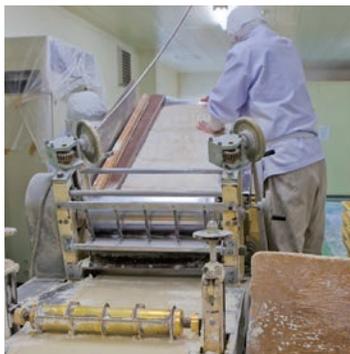
香川の銘菓として世代を超えて愛されている「瓦せんべい」。日本には瓦せんべいと名の付く菓子がいくつもあるが、宗家くつわ堂のものは、ひとときわ固いのが特長である。初めて食べるるとびっくりするかもしれないが、やがて「この歯ごたえがなくては物足りない」と感じるようになる。カリッと噛めば、口の中にゴマの香りとやさしい甘さが広がる。



## 瓦せんべいづくりは、 ほとんどの工程を人の手で行っている。

瓦せんべいが誕生したのは、明治の文明開化から間もないころ。讃岐の地の特産品であった和三盆糖や、うどんづくりに欠かせない小麦粉を使って新しい名産品を生み出そうと考案されたのである。米粉ではなく小麦粉を用いたせんべいに、和三盆糖の一步手前となる白下糖の奥行きある甘み加わったハイカラな味は、発売するとすぐヒット商品となった。以降、100年以上経った現在も、変わらぬ味のまま愛され続けている。

工場の中を見ると、ほとんどの行程を人の手で行っていることに驚かされる。機械化を検討したことはあったが、同じ味を出せなかったようだ。今もなお、人の手で焼かれている瓦せんべい。1枚ずつわずかに焼き印の位置が違うこともアイデンティティである。



焼かれる前の生地作りも、ほとんどの行程を人の手で行っている。白下糖を煮詰め、生地を伸ばし、様々な大きさにカットして箱の中に並べ、手焼きの行程へとパトタッチする。



焼き加減を見極めながら、丁寧に焼き上げていく。  
大きくなるほど難易度が上がり、最大サイズを焼ける人間は2、3人ほど。多い時で1日2万枚以上の瓦せんべいが製造される。



## 伝統に新しいアイデアを加えて。

今年から新たにハローキティとのコラボレーション商品が仲間入りした瓦せんべい。その懐の深さにより、伝統の味は「今の味」として若い世代へ受け入れられていく。

宗家くつわ堂では、瓦せんべいにオリジナルの焼き印を押すサービスを実施している。結婚式の引き出物や、企業の記念品として重宝されているそうだ。冬期にはチョコレートを合わせた「瓦ちよこ」も店頭に並ぶ。田村昭夫社長は「新しいアイデアを上手に加えることで、伝統を崩さずに瓦せんべいの可能性を拡大したい」と考えている。



新しい試みにも積極的な田村昭夫社長。



瓦せんべいに新しい風を吹き込んだハローキティ。



工場の中には、今まで頼まれたオリジナルの焼き印が残っている。

# 人間の真景しんけい

志村栄至(評論家)



最近は、ニュース番組で見掛ける集団登校の小学生の姿が尊く見え、こちらの年齢のせいだろうか、苦笑しつつ拝見している。

しかし、彼等は今、祖父・祖母との同居が少なく、一時代前とは別種の間形成を辿るのだろうかと推測され、安閑としても居られまい。小林秀雄が「プラトンの『国家』」で書いている以下の話とも無縁のまま生きてしまったら、実にもつたないことだ。

「昔、エルといふ勇士が、或る戦で戦死して、十日ばかり戦場で腐つてゐたが、火葬場の薪の上で突然、生き返つたといふ不思議な話があった。この男は、その間に、ちよつとあの世に行つて来たさうで、その見聞したところを、人に語つたといふ。」

その先で、人間の誕生時の秘話をこう書く。「めいめい次の運命を選んだもの共は、(中略)〈忘却の原〉を横切るのだが、喉が喝いて、誰も彼も、〈忘れ河〉の水を飲んでから、めいめいの誕生に向つて運ばれるから、運命

は自分が選んだとは、誰一人、考へないやうになる。」

続けて、こうまとめるところが、小林の心を鮮烈に印象づける。

「エルの語るところは、人間の真景であり、プラトンが、物を考へる時に立つてゐた最も鞏固な地盤である。」

ところが今、少年少女がいじめで、また、二十代の人が職場での軋轢から、自死を選択したという、悲劇的ニュースが流れる。人生を勉強するということが裏に廻つて、頭脳に執着することが学ぶという行為と化している気がしてならない。

小林「読書について」にはこうある。「自己反省とか自己分析とかいふ浪漫派文学の産んだ精神傾向は、感傷と虚榮との惑はしに充ちた、架空な未熟な業に過ぎない。」

では、それらに代えて、自身は何を最も重要視して人生を切り拓き、周知の社会的地位を築いたか。誰でも若年時には、理詰めで問題に対応する。小林も最初はそうしたかも知れないが、

それを超短期間で突破したと思われるところが、普通人とはやや違う。

それは、比較的、若い頃の『断想』のラストで既にこう書いていることから推察できる。

「感心することを怠りなく学ぶ事。感心するにも大変、複雑な才能を要する。」

あの小林がそんなことを、と思われ人はいるかも知れない。極めて下世話な見解のように判断され易い姿をしている。しかし、これは間違いなく、小林の方だ。

理詰めで攻める、いわゆる論理を尊重することには目を向けず、なぜ、小林はこの径を行ったか。ここにロシヤの先人、ドストエフスキイが浮上する。この人から受け取ったことがいかに大きかったかを示す言葉を、かなり後に、或る本のあとがきに見つけた。自らの単行本の序でこう書いていた。

「久しい間、ドストエフスキイは、僕の殆ど唯一の思想の淵源であった。」  
ドストエフスキイと聞けば、『罪と

罰』を連想する人は多いだろう。しかし、これをこの世に送り出した人のキャリアは知られていない。小林の著作からこの先人を重い描くところなる。人間的な良心、善意から先人は社会改革に賛同、文書活動に参画した。ところがこれが当時の社会体制では犯罪に相当した。この苦しい人生体験は裏に廻っている。

青年期の約四年間、オムスク市郊外の厳寒の獄舎で労役に耐えたときれている。真つ正直で純粹そのものの善意から邁進した行動が結果的にもたらしたものが、地獄の苦しみであったなら、その苦悶は測り知れないほどであったと想像される。その時、先人に訪れたヒラメキがどれほどのものであったか、傍人には知る由もない。

ただ、若き小林の感性だけは、他の誰よりも鋭敏に反応した。これが、小林の『罪と罰』について「の読後感だ。しかし、月日の経過はやがて、ここには人生の糧となつてくれる最大級の何かがある、と思えて来る。」

もう一度、ドストエフスキイに戻る  
と、獄中での苦悶は、その後の人生の  
しがらみとなって苦しみ続けたのか、  
と思われがちだ。ところがこれが大違  
いで、小林の論述からは、先人は地獄  
の苦しみを大逆転させたとの感触が  
伝って来る。

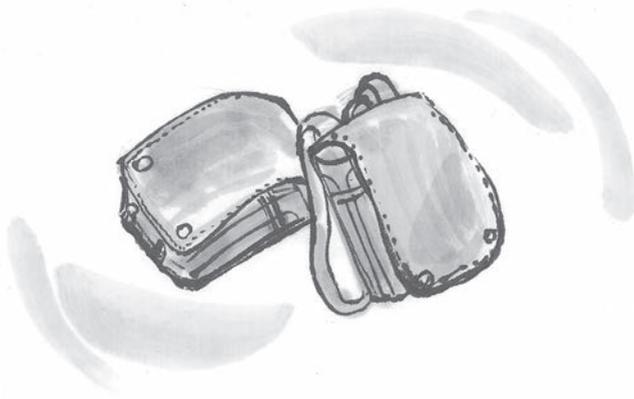
それはいったん脇に置くが、小林は  
これも若い頃だが、文士仲間との座談  
会で、「皆さんは利巧だからたんと反  
省なさるがいい。僕は反省しないと発  
言して、失笑を買った」とどこかで書  
いていた。冗談めいているが、この人  
は案外、こういう形で心の深いところ  
を露わにすることが多い。これもその  
典型だ。

精査すると言葉を使うのはおこがま  
しいが、小林の真意がこう汲み取れ  
る。過去の日々が仮りに地獄のような  
状況だったとしても、人間の「視力」  
はそれを反転させて、肯定的に心に受  
容できる時はやって来る、と。

「運命は自分で選んだ」との勇士エ  
ルの話を、「人間の真景」とまで言い

切ったが、さらに、「プラトンが物を  
考へる時の鞏固な地盤である」とまで  
添えたのは、小林の胸の内をしつかり  
表明していると思えてならない。

人生を左右する大事だから繰り返し返す  
が、過去の日々がどれほど過酷なもの  
であれ、自分が「選んだ」ということ  
に敬意なくして、順風満帆な人生はあ  
り得ないと思われるが。



# 初日の出

佐川 毅彦

沖繩の浦添市の城跡、琉球王朝初代の王舜天の城である。夜になるとこぼれた宝石の粒たちがキラキラ輝いて、東支那海へ流れこんでゆく。夜景の右側太平洋のかなたから日は昇ってくる。そこは日の出を拝む人氣の場所でもある。

元旦の夜明け前、私は二人の息子と城跡への長い坂を上ってゆく。同じ方向へ歩く人がゾンビのようにゾロゾロわいてくる。十五分ぐらいゆくと朽ちた城壁が現われてくる。その先は回りを木々でかこまれた大きな広場となる。地元自治会の人たちがテントを張って、長テールを出して、初日の出を祝うささやかなお祭の準備をしている。そばで大勢の人がにぎやかにさわいで日の出を

待っている。もっと先にゆくと日の出のよく見える場所がある。が、その前にロープが張られ、危険入るな！ハブに注意！と書かれている。それなのにロープをこえてゆく輩がいる。私たちもロープをまたいで、細長くのびている崖に立つ。草木で幅がわかりづらく、かなり危ない。だがなんとか、崖つぶちまで、たどりつくことができた。

二十人ぐらいの人がイースター島のモアイ像のように同じ方を向いて立っている。崖の六十メートル前方にめざわりな大きな岩がつきでている。その後ろから日は昇ってくる。すこしずつ、ゆっくりと明るくなってきて、岩の後ろが光をおびてくる。しかしなかなかでてこない。

しだいしだいに岩の頭がまぶしくなってきた。まぶしすぎる。ウワーツでた！オーツ！我々は感動して、頭上に高々と拳をつきだして雄叫びをあげる。波がバッシャン！と岩にぶちあたり、日の光の中で散ってゆく。好き勝手な願い事を胸に我々は合掌する。宝クジが当たるように、嫁ハンがみつかるように、妹が転んで頭を割るように：

それがすむと、サツサと中央の広場へ引き揚げる。そこにはふるまい酒が待っている。長テールの上に泡盛、ビール、日本酒、それに小袋のツマミもある。係の人が一杯ついでくれる。私は日本酒をもらう。ひえた酒がすきっ腹にしみわたり、こちよい。やっぱり正月は日本酒が

いい。息子たちにも日本酒を：彼らは車の運転があるので、私が飲む。私だけ、ほろ酔いかげんで家に帰る。途中、季節はずれの小さなヒマワリの花がいたる所から笑いかけてきた。今年はいいい年になりそうである。



# ほろ酔い話

永岡 慶之助  
(作家)



もう十五年は前になるか、この家も古いものだからと云うのは、言い訳であるのか、増えに増えた本の重量に耐えかねた我家の床が、抜けそうになった。

最初は二階で仕事をしていたが、その時も、持ち込んだ本が平積みで置いてあったものだから、足の踏み場がなくなってきたこともあるし、「家の二階が落ちてしまう」と家人が心配するので、本を一階へ全部降ろし、できる限り重さを分散して配置し、ひと安心していた。ある日、家人が騒いでいた。何事か！  
「廊下の柱と床の張りの間に、隙間がある」

「きっとその内、床が落ちてしまう！」

と云うので、一階の床を強化する決心を、しなければならなくなった。これは一大事である。分散させた本を移動しながら、床を剥がし、柱と横木を強化し、床板を新建材と取り替える作業をするのだ。

まず玄関から、玄関は畳の三帖間で、ここにも本を置こうと思うので板の間に変更。次に家の真中ほどを東西に十メートル程、北に四、五メートル程を生活に支障がない様に進めて行った。その際に、今まで何十年も覗く事がなかった床下を、初めて見る事ができた。現在のように床下に基礎コン

クリートを流し込み、固めてあるのではなく、地面を、いわゆる『ヨイトマケ』という方式で土を固めており、その上に柱を乗せる土台石を配置してある。床下が湿らないように、風が吹き抜けるようになっていた。そういえば、台風や長雨の後に、よく台所から玄関まで戸を開け放していた事を思い出す。それも、増える本や資料、家具などで、いつしか家中に風を通すのが疎そかになっていた。

落ち着かない日々であったが、いよいよ、座敷の段になった。二間続きの和室も、一階に本がなかった頃は、年末になると、畳を総べて上げて干したものだだったが、本を降したため、それ

も怠っていた。一枚づつ畳を取りはずし、床板を捲くると露わになった床下には――

この家が建てられたのは、明治後期だから、先代が秘かに隠しておいた宝物とか、慶長小判の一枚ぐらい入った木箱が、あるといいなと、淡い期待を抱いていた。

目にした情景は、縁側に近い床下に、ずらりと転がる、一升瓶とビール瓶とおぼしき塊が、土埃を被る。埃を拭くと、水色した青きガラス瓶製のそれは、ラベルから推測するに、どうも昭和三十年代あたりのものである。一体、誰が、何の為に。記憶にはないが、どうやら僕が飲んだとしか思えない。

床を剥がした大工も驚いたと思うが、家人は呆れかえり、僕もがっかりだった。

しかし何度考えてみても、三十本以上の瓶を何故床下に置いたのか、謎だ。卑劣にも僕が、こそこそと隠れて飲んでいたのか？とんと覚えがない。

まあ酒飲みは、酔いが醒めると、ほとんどの事は、忘れていくものだ。仕方がない。

僕が酒と付き合うようになったのは何時の頃からだろう。おそらく会津から始まっていると思う。会津は米がうまい。酒もうまい。今では流通が良くなつて、日本全国の米や、酒が手に入るようになったが、僕が東京に出て来た当時から流通が盛んになるまでは、あまりに米がおいしくないのが、会津から米を送ってもらったことがある。

おいしい水と米があるところは、酒がうまいということで、会津も藩政時代より酒造りが盛んで、僕の生まれ育った町も、小さな町ながら、寛文八年（一六六八）に酒屋が二百四十三軒もあったという。それより前、万治元年（一六五八）に幕府より、江戸・京都・大坂・堺その外の名酒、所々の諸国、全て例年の半分造りとし、新規の酒造は一切禁止令<sup>①</sup>が出されていたのに。食料としての米を守る目的もあったのだから、酒屋の数が多い。

僕の青春時代の酒は「ドブロク」で、透明な日本酒が飲めるようになってのは三十代に入ってからだ。結婚直後は、鎌倉にしばらく住んでいた。米はなんとか手に入っていたので、家内が炊いた米を一升瓶に詰め、水を注ぎ、木の棒で突つき潰し、毛布で包み炬燵の中で発酵させ「ドブロク」を作り、仲間を呼び、酒盛りだ。少し酸っぱかった思い出。

その後、群馬の方に引越すことになるのだが、都内からJR高崎線に乗って帰宅するつもりが、どういう訳か群馬を通り過ぎて、国境の長いトンネルを抜け、気がつけば終点の、新潟は長岡の駅に列車は止り、車掌さんに起こされた。始発が出るまで寒さに震えながら、待ち合い室で時間が経つのをただひたすら耐える。つらかった。あれは真冬のことだったな。

酒の失敗は数え切れないが、ほろ酔いの楽しい気分を味わう為に、酒は、やめられない。

# 戌・午・辰



山本千明  
(ECC英会話講師)

今年の十二月、私はめでたく母と「同い年」となり、兄よりも二十一歳「年上」となる。

母 (享年) 六十歳 辰年  
父 (享年) 八十七歳 亥年  
次兄 (享年) 三十九歳 午年  
長兄 六十八歳 寅年  
私 六十歳 戌年  
明るく世話好きで聡明だった母  
頑固一徹、典型的な昭和の親父だった父

探求心が旺盛で明敏な次兄  
真面目で努力家の長兄  
勉学に勤しんでいた上の兄の通知表は(体育と図工以外は)常にオール5。対して「努力」とは無関係に生き

ていた下の兄の通知表は彼の美的センスの表れか、いつも美しい白鳥(2)の群れが印字されていた。後に芸術を専攻するほど創作力に長けた兄の図工の成績までが何故に「白鳥さん」だったかという点、それは「課題、宿題、等の提出物は一切出しません!」という彼の「強〜い信念」の結果に他ならなかった。

母親は、長男の懇談会で褒められたが、次男の場合は、懇談会でもない日にたびたび呼び出された。

「穴があつたら入りたい」と嘆く母の傍らで、この「問題児」は「よし!いつか母ちゃんに親孝行しよう!」と心に決めて「どこに穴を掘ったら喜んで

でもらえるか」と真剣に考えていたらしい。

「九歳も年上の長兄」は私にとつて「親」に近い存在であり、父親は国鉄マンとして多忙な日々。よって毎日の戦いは「私vs次兄」&「次兄vs母」の真剣勝負だった。

四歳違いの兄上様には、腕力で敵う筈もなく、喧嘩の度に、叩かれた。それでも何かと兄に纏わりついていたのは彼の周りに「宝の山」があつたからである。

彼の切手コレクションには鳥や花やピノキオ等の可愛いデザインのものが並んでいた。硬貨に薄紙を被せて兄が上から鉛筆でササッと塗ると、美しいコインのシルエツトが浮かび上がる。消しゴムを器用に切り分けて彫刻刀で彫っていくと次々に小さな犬や猫が生み出されていった。それらの「たまらなく魅惑的な展示物」に引き寄せられるは「罨」にハマられてしまう幼気ない妹の私。

「兄ちゃんがほんまに勉強しよるか

見てきて」と、母のスパイ要員となり、そつと様子を窺うと、「天才芸術家先生」は机に向かって一心不乱に消しゴム彫刻の製作中だった。思わず覗き込むと、ピクツと振り向いた「先生」が一言。「これやるけん、母ちゃんには勉強しよつた、て言うんぞ」手の平に可愛い「消しゴム犬」を乗せられた私は「キビ団子」をもらったワンコのように「うん片」と尻尾を振ってニコニコ頷く。

喧嘩をする度に叩かれて泣かされた記憶もあるが、たまに切手をくれたり、おやつを分けてくれたり、兄貴らしい優しい面もあった。(よくな気がする)

さらに、大人になってからの彼は人間のにも奇跡的成長を遂げ、最愛の母親が末期がんであることを告げられると「穴を掘る」代わりに毎日のように病院に通い詰めて励まし続けていた。そしてそんな兄に心から感謝しながら母が亡くなって僅か五年後。今度は自分が白血病との苦しい闘いを強いられ

ることになる。それでも子供の頃より培ってきた「強い信念」で「最後の最後まで明るく周囲を笑わせて、自分の生き様で感動させる」という「人生の課題」を成し遂げて見事にカッコよく旅立った。

気が付けば、いつの間にか兄の歳を追い越して母の歳になろうとしている自分がここにいる。そんなある日、実家の長兄から電話があった。亡き兄の作文が棚の奥から出てきたという。

小学二年生の、平仮名ばかりの微笑ましい作文が三枚。なんと！一枚目の題名は「ちあき」である。ほんわかと幸せな気持ちで読み始めると：「ぼくが、ちあきをなかしたとき、『わくわくくん』となきました。そのときはかあちゃんがいなかったので、ぼくが、ないたらきつて(切手)やらんといつたら『えへ』とわらいました。また、きつてやらんというとなきだした。もう、うるさいので、ぼろぎつてをやつたらなきおわりました―後略①」何じゃこりゃー！と別の作文をめく

ると、今度のお題は「けんか」：「よる、ちあきとけんかをしました。ぼくはかんかんにおこつてちあきのおしりをさんかいばちんぱちんとたたきました―後略②」

ちよいと兄貴をあちらの世界から呼び出して正座させて反省文のひとつも書かせたい気分である。ただ：読み進めると、それぞれの作文の続きには、こんなことが書いてあった。

「後略①↓それからちあきとあそびました。『ちあき、もういちまい、きつてやるか』といったら『うん』といいました。ぼくはさつきよりいいのをやりました」  
あらまあ。

「後略②↓ちあきがないたのでかあちゃんが出て、ぼくのおしりをぶちまけた。にいちゃんもきておんなじところをたたいたので、ぼくは『あくん』となきました」  
あらあら。

私も「年相応」に大人になった証に：まあ、許してしんぜよう。

# ヤマガラがやってくる

宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)



庭のピラカンサの実が赤く色づく。

朝の薄明かりのなか、家のどこかを規則正しくノックするような音が聞こえる。何の音なのだろうか。台所の出入り口のドアを開くと、音がピタリと止む。閉めるとすぐに始まる。庭に人の気配があるとピタリと止まる。音は一日中、夕方暗くなるまで続く。一週間ほど続いている。何かが家のどこかを叩いているみたい。何者？ 不思議さに心惹かれ、音の主を探す。そういえば、何日か前からヤマガラが母屋と蔵の間の通路を頻繁に飛んでいた。納屋の軒下のスペースのあちこちにもヤマガラが飛来した痕跡があった。母屋の北側の田に残されていた支え木で鳴き

ながら尾羽を規則正しくしかも素早く動かすヤマガラの姿を窓越しに見かけていた。母屋の軒下に設置している石油ボイラーの前に、ピラカンサの黒い小さな種子と果肉の一部が散乱、ヤマガラのフンもたつぷりと。石油ボイラーの前で何かをやっているらしい。少し離れたところから静かに見ていると、ヤマガラが石油ボイラーのステンレス製の壁に向かってくちばしをぶつけている。遠くから見ていると、鏡のような面に映る自分の姿に向かってくちばしでつついているよう。くちばしを痛めるのではないかと心配するほど熱心に。つつくたびにドアをノックするような音が発生する。ボイラー全体

が共鳴しているらしい。音源は確かめられた。でも何のために。近づくたびに飛び立つので、観察もままならない。ピラカンサの実の大きさはヤマガラがくちばしで噛み砕くには少し大きすぎる。大きいのが、食べたい。どこかで食べやすいサイズにしたい。そこで、ステンレス製の壁に運んできたピラカンサの実をぶつけて砕くことを思いついたらしいと推測する。鏡面の自分の姿を見ながらの碎く作業。ねらいは正確この上なしと言えそう。さすがとしか言いようがない。生きるための知恵とはいえ、ヤマガラの応用力に感心する。おかげで、石油ボイラーの近くはピラカンサの実の果肉部分と種子の残骸やヤマガラのフンだらけ。見事に餌場と化する。

ピラカンサの実はそんなに美味しいのだろうか。果肉を試食する。甘みはなく、舌を刺激する嫌な味もない。収穫から時間が経ち、萎みかけたりんごの食感に近い。私の舌に美味とはとてもいえない。道具を作るまでとはいか

ないが、ヤマガラが近くで手に入るものを道具がわりに利用する行動は興味深い。高い知的能力をもっているのだろう。

ノックするような音は約三週間続いて、今は途切れがち。庭のピラカンサの実はまだ残っている。同じものばかり食べていると、さすがにあきるのだろうか。ヤマガラは、夏場は動物食が中心となるという。冬場は果実などの植物食が中心となるという。季節に応じて、手に入りやすい食べ物をうまく利用していると言えそう。ヤマガラが生きるための努力、その巧みに感服する。

十数年前だったと思う。ニューカレドニアのカラスが葉っぱを加工して木の中にすむ虫を釣り上げ、餌とする報告 (Science, 9 August 2002, pp. 981) を読み、鳥の仲間もそれなりの道具を製作するのだと驚いたことを思い出す。内心まさか鳥がと思う自分がいた。我が家へやってくるヤマガラが私の目前で、道具がわりにステンレス

の壁面を使うことに出会い、まさかを横におくことにしたい。まだまだ、知らない世界が展開している。ヤマガラのおかげで鳥の知恵を知ることがかなう。なんだか嬉し、楽し。

ヤマガラは学習能力が高いとされる。その昔、おみくじを引かせる芸など、多くの芸が開発されていたらしい。『ヤマガラの芸』(小山幸子著、法政大学出版社、1999年、pp. 93-116)によると、おみくじ引きの他に、つるべ上げ、鐘つき、かるたとり、那須の与一など、多くの芸が記載されている。家内がさっそくですがと、持ちかけてきた。第七十一番札所弥谷寺の山門前にある「俳句茶屋」近くに棲むヤマガラのことを思い出したらしい。

「あのヤマガラのように、手乗りで餌を食べるようにできないか」と。気が向いた時に、手乗りで餌を与えたいらしい。「試みるのはいけれど、食べた後のお土産がいたるところに展開するかもしれないよ」と答えると、「それは困る」とおっしゃる。大切な人の願

いなので、先ずひまわりを育て、ある量のひまわりの実を確保することから始めたいと考えている。来年は、実を取るためのひまわり作り。実が収穫できる頃には家内の気持ちが変わっているかもしれないが、来年の栽培予定植物の一号と決める。

静かな我が家は野生の動物たちにとって居心地のいい雰囲気があるのかもしれない。遠慮なくやってくる。動物によつては大きな音を立て、こちらが驚く。多くの場合、居心地の良い場所を探すために、仕切板を外したり、引っ掻いたり、屋根の上を闊歩したり。時には子育ての場を求めて。驚ばりるところを通ると音は極めて大きい。野外の気温が下がり始めると動物たちの居場所探しが発見になる。まるで冬の訪問者。明るい時間が少なくなり、なんとなく寂しさを漂わせる冬の季節に彩りもあたたかさを届けるように。何れにしても、少し暖かくて寝心地のいい空間を求めることは人と変わらないらしい。